

平成二十八年 秋

名も知らぬ 虫の音集い シンフォニー 淋しき胸の 琴線揺らす
混じらんと はや色づきし 木々の影 水面に集う 朝の静けさ
落ち葉掻き 生きていてこそ 風物詩

平成二十八年 冬

おお寒むや 布団の中の 春憩う
モンキチヨウ ごとくに舞い散る 櫛居ぬ
吠える風 足音隠し 探す春

平成二十九年 春

飛行雲 幼児の描きし 絵のように 青空区切り 乱れ交わる
陽を撥ねて 緑こもごも 輝きて 苔むす坂に 歩み獲られる
薄紅を そとと刷いたる 西の空 春の夕焼け おぼろに染まる
水ぬるみ 釣り人戻る 池のふち
木々芽吹き 鳥声高く 花香る
風浴びて 未練残さず 奔放に 桜舞い散る 風情愛でたや

平成二十九年 夏

うたかたの 時の流れに 薄れゆく 想いで探す 眠れぬ夜は
こんなこと あんなことさえ 束の間に 驚きうれしき 孫の成長
いつまでも 親は子の親 変わらじと 瞼に宿さん 子等の生きざま
雨後の陽に 背中つややか 団子虫 光と令 混じらせ行かん
からからと 枯れ葉舞い落つ 猛暑ゆえ 我が身を守る 自然の知恵か

平成二十九年 秋

天を航(ゆ)く カラス小さき 秋の空
いざ競え 太鼓のばちに 虫の鈴 (だんごり祭りのけいこ盛ん)

名月や 黄金(こがね)のザラメ 水面掃く
ぎやあぎやあと 棲み分けめぐる 天荒し
様々な 雲広がりて たおやかに 朝のひかりに 色吹く湖畔
赤髭に 青髭混ざり 秋に立つ メタセコイヤよ ハロウィン模様
朝日浴び 赤み増したる 紅葉咲く カメラ構えて アングル探る
父母の 思い出尊き 形見かな
朝もやの レースをくぐる 陽(ひ)をまとい 秋のにぎわい おぼろに透ける
すつかりと 色に染まりぬ 散歩径 落ち葉を連れに サクサクサクと

平成二十九年 冬

スーパームーン 熱燗一杯 顔そめて
暇の束 火鉢にくべて 暇つぶす (だんだんとすることが少なくなる近況)
水鳥の 鳴き声強き 朝冷えの 草陰に降る 陽の星キラキラ
古希の春 背筋伸ばして 風匂う
初春の 水面に浮かぶ 日輪の 水紋乱る 水鳥交り
寿春に 夕焼け空に 白いサギ
寒去りて 青空見上げ 機影追う
記録的 寒波どっしり 居座りぬ 逆さ簾で お帰りせかす
風冴えて 寒き青空 雲重し

平成三十年 春

風波に 身をゆだねたる 鴨たちは プカリプカリと 氣ままに揺れる
山の陽に 身を沈めて 春探す (残雪多き山中温泉にて)
溪谷に 深き残雪 遅し春
冷や雨に 湯煙白し 一段と
セキレイの 翼の扇子 きびきびと パット開いて シャキッと閉じる
謳歌せん(桜花千) そそと舞い落つ 惑いなく
春最中 見事自然の 筆使い 色彩り豊か 濃淡描き分く
十歳の 年の差保ち 刻歩む 青春傘寿で また集わん

(五月二十日中学同窓会)

年ごとに 巧拙変わる 鶯の 今年の節は 鐘三つ

平成三十年 夏

皆き風 緑を揺らし 野を渡る
身を守る 術に健たる 行政の 知恵を分かたぬ ああ弱者には

(大阪地震・西日本大雨)

夏草の刈り取られて 緑き芝

笑顔咲く 母子居りし 老館 (娘と孫二ヶ月の同居)

燃ゆる夏 朝立ち 緑とす